詩編 11 編の黙想　主は、わたしの避けどころ（2020 年 5 月 1 日分　TM）

　今日も一日を、聖書を読み、祈ることではじめ、また、一日の働きや思い煩いを主に委ねて休みにつきましょう。この世の出来事をしっかりと注視し、しかも、不安や恐怖からではなく、過敏症にも絶望的緩みにも陥ることなく、主なる神への感謝と喜びから生きることにしましょう。まず、祈りつつ、ご自分で 11 編を読みましょう。

・「主を、わたしは避けどころとしている」（1 節）この言葉は 7：2 にも登場しました。荒野の砂漠地帯では隠れる場所が少ないのです。「かくれんぼ」をすれば、すぐ見つかってしいます。ダビデの歌であるとすれば、サウル王に追われて逃げ惑った時、あるいは、アブサロムの反乱のときであれば息子に裏切られ都落ちする一大事の時でしょうか？　口語訳では、「わたしは主に寄り頼む」と翻訳しています。「ハシティ」→「ハーサー」はシェルターを求めて逃げる、「難民となること」を意味していますが、そこから、「信頼する」を意味するようになりました。自分が難民であることの不安、避難所を見出した時の喜びを思い浮かべましょう。英語で表現すれば、文頭に In Yahweh「主において」が置かれているので、「主をこそ」避けどころとするということでしょう。私たちは、何を、誰を避けどころとしているでしょうか？そして、また、現在多くの「難民」がいること、日本在住の外国人たちの不安を覚えたいものです。
・「心のまっすぐな者」が 2 節と 7 節に二度登場し、「主に従う人」が 3 節と 5 節に登場します。「心のまっすぐな者」（ライ　レィシーレイ）とは、たとえ困難の中にあっても落胆したり、他と比較したりせず、心を主なる神に向け続ける者」です。「主に従う人」は文字通りでは「義人」という言う意味です。
・誘いの声：「心を主に向けてまっすぐに生きようとする者」にも誘惑はあります。恐れて、鳥のように山へ逃れよ」、「弓を張り、弦に矢をつがえ、闇の中から狙っている者たちがいる」とささやく声が聞こえます。「世の秩序が覆っている」。これは歴史上度々襲う経験です。「世の秩序」（ハシャトート）とは土台、大黒柱が破壊されている様です。多勢に無勢、権力を笠に着る者たちの前で、信仰者は何ができようと言う声があります。うなだれてしまいます。しかし、義人、心のまっすぐな者は「主に逆らう者」（2 節、5 節、6 節ラシャイーム　ねじ曲がった邪悪な者）や「不法を愛する者」（アヘイブ　ハーマース＝暴力愛好者）の中で主なる神に心を向けます。
・主は正義であり、正義愛好者である：なぜなら、主なる神は「正義」であり、暴力愛好者ではなく、「義の愛好者（ツェダコート　アーヘイブ)」、「恵みの業を愛する」（7 節）お方であるからです。
・　人と世界を見渡し、調べるお方：世の中が不正と暴力、邪悪に満ちていようとも、恐ろしいウイルスが襲おうとも、主なる神は地上においては「聖なる宮」に、天上においては審きの御座につかれ、その目（4 節)、まぶた、御顔は（7 節）は人の子らを見渡し、調べておられる（イェブハーン　バー)、「主に従う人と逆らう者」の区別を洞察・吟味して下さる。主は天におられ、同時に、地におられるお方です。
・　御顔を心のまっすぐな人に向けてくださる（7 節）
　口語訳は「直き者は主のみ顔を仰ぎ見るであろう」と翻訳し、青木澄十郎は「直き者は彼の顔を仰ぎ見るべし NASB, ISV,NRSV」と訳します。新共同訳のように「彼の（主なる神の）顔を心のまっすぐな人に向けて下さい（まっすぐな人に向かう KJV）と翻訳することも可能です。
・5，6 節にあるように、長い目で見れば、また、究極的に見れば、主なる神は暴力愛好者を憎み、ねじ曲がった者らに正しい審判を与えてくださる。ここに希望があります。